氏　　名	藤　川　美代子
学位の種類	博士（歴史民俗資料学）
学位記番号	博甲 第 190 号
学位授与の日付	2014 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文の題目	連家船漁民の研究 －水・陸のはざまを生きる福建南部の水上居民－
論文審査委員	主査　神奈川大学　教授　佐　野　賢　治
	副査　神奈川大学　教授　小　熊　　誠
	副査　神奈川大学　教授　田　上　　繁
	副査　國學院大学　教授　渡　邊　欣　雄

【論文内容の要旨】

本論文は、中国福建省九龍江河口で長年、船上生活をしてきた「連家船漁民」の自己認識、エスニシティについて参与調査をはじめとする一次資料に基づいて考察したものである。

連家船漁民は新中国成立後、集団化政策・改革開放といった社会の変化を経て、生活拠点を陸上へ移して行く中、地域社会からその生業・生活形態、行動様式・身体的特徴が見せる異質さを理由に、差別的な扱いを受け、社会的・文化的マイノリティとして社会の周縁に位置づけられてきた。本論では、彼ら自身の「名乗り」に注目し、その自己認識の諸相を漁業や水上運搬の形態に探り、通婚をはじめとする社会関係から連家船漁民と近隣の地域農民との関係性に言及、国家レベルで認定された連家船漁民たちが、地域社会の中で自らをどのように位置づけているのかを検討する。一生を船上で過ごす生活が過去のものとなった現在、連家船漁民が行う神明祭祀や祖先祭祀、葬送儀礼の中には、周辺農村や市街地に暮らす人々との間に差異が現れる。こうした差異を、連家船漁民自身がどう捉えているのかを、彼らの側の言説に寄り添う形で具体的に提示する。本論の構成は、第Ⅰ部「社会変化期を生きる連家船漁民」、第Ⅱ部「自己の位置づけを模索する連家船漁民」、第Ⅲ部「水上／陸上のはざまで」と内容を大きく 3 部立てとし、序章と終章を合わせ全 7 章で論述を進める、以下大要を示すと、

序章では、論文全体の目的と問題の所在を明らかにし、本論文の基礎資料となる調査の方法について提示し、中国の水上居民に関する先行研究と、世界の他地域に暮らす水上生活者たちに関する先行研究について整理し、本論文の水上居民に関する研究史における位置づけについて述べる。

第 1 章「連家船漁民とは誰か」では、中国・福建省および福建省南部の沿海部や河における船上生活者が、研究者たちにどのように捉えられてきたかを概観した後、九龍江河口に暮らしてきた、いわゆる「伝統的な連家船漁民」の姿を捉える。現在、遡ることが可能な中華民国期の「以船為家」という言葉に代表される彼らの生活が、どの地域を中心にどのように営まれていたのか、連家船漁民出身の郷土史家たちの記した資料や档案資料、フィールドワークの中で得られた聞き取りの資料により再構成する。漁業や水上運搬の形態のみならず、通婚をはじめとする社会関係に注目しながら連家船漁民と近隣地域の農民たちとの関係性に言及する。また、過去に陸地に暮らす人々から浴

びせられた「水鴨仔」という悪意のこもった名づけと、自らも船上生活を経験した郷土史家が自分たちを呼ぶ際に用いる「連家船漁民」という言葉、そして船に暮らしながら漁に従事してきた人々が日常生活の中で自らを指す際に用いる「討海人」・「抓魚人」という名乗りという三者の間にある関係性を取り上げることにより、九龍江河口という地域社会において、陸上に暮らす人々、郷土史家などの知識人、船に暮らす人々自身が、互いに何を指標にして船上で生活する人々を認識してきたのかその差異を具体的に明らかにする。

第２章「土地と住居獲得の歴史―集団化政策と定住化を経て」では、中華人民共和国成立後の共産党政権下において、連家船漁民が近隣農民や都市住民とほとんど変わらぬ生活を手に入れていく過程に着目する。中華民国期末から共産党政権下に入る時期を経て進められた集団化政策の過程で、福建省南部の連家船漁民の社会がどのような変化を見せてきたのかを概観した上で、この時期の連家船漁民たち生活ぶりを数家族の語りから再構成する。さらに以前は、分散して漁撈を行い、台風や節供などの折には漁船幇と呼ばれる父系親族集団の単位ごとに農村部に所在する根拠港へと帰港していた連家船漁民たちが、1960 年代から本格的に始まった陸上生活での住居の獲得後、一つの漁村へと生活の拠点を移してゆく過程を論述する。

第３章「祭祀活動に見る連家船漁民の集団意識―共存する『宗族』・『角頭』・『大隊』」では、父系的系譜関係により形成される血縁集団としての宗族組織が著しく発達した東南中国地域にありながら、自らの祖先の歴史を証明する族譜や位牌を保持せず、加えて宗族組織中心の風俗習慣が欠如しているといった従来の研究における水上居民を特徴づけるいくつかの論点に対し事例を示しながら再検討する。現代を生きる連家船漁民がこうした指標では計れぬ自分たちなりの原理に基づきながら、自らを地域社会の中に位置づけている現状を明らかにする。具体的には、祖先祭祀や神明祭祀の活動を通して、1）船で移動生活をしていた時代に根拠地としていた港がある農村に暮らす農民たちを中心に組織される宗族組織、2）集団化の過程と改革開放を経て、経済的にはその結合力を失ったかに見える漁船幇内の同姓親族集団、3）集団化政策の中で新たに形作られることになった漁業生産大隊から現在の漁業社区へとつながる組織、という 3 種の異なった方向性を持つ社会的紐帯への帰属意識が、現在を生きる連家船漁民の中で重層的に共存する実態を描く。

第４章「連家船漁民の眼に映る陸上の人々との差異―葬送儀礼と『祖公』をめぐる理解」では、生活の拠点を陸上へと移したことによって、一見すると、近隣の農民や市街地の人々と変わらぬ生活を手に入れたかにも思われる連家船漁民たちの葬送儀礼や祖先祭祀の中に、依然として農民や市街地の住民たちとの間に存在している民俗事象の微細な差異があることを認め、連家船漁民自身による積極的な意味づけをそこに見出す。連家船漁民は自らが近隣の農民や市街地の人々とは異なる方式、死者の遺体との積極的な関わり方で遺体処理をしてきたことを農民たちの葬式よりも優れていると自負するその背景を分析する。自分たちと陸上に暮らす人々との間に依然として横たわる民俗事象の差異と、何を孝、親孝行と見なすのかという考え方の差異を分析することにより、その差異は農民とは異なるものの一方的に陸上の人々から蔑視され得るようなものではないと主張する連家船漁民の考えを紙厝など具体的葬具を通して浮き彫りにする。また、遡ることができる祖先の世代深度の圧倒的な浅さと、同姓父系親族の範疇に入ることもない死者、さらには異常死を遂げた死者をも祖先として認めることができるという緩やかな祖先の条件を持つ連家船漁民の祖先観に注目する。数多く存在する自身に関わる死者の中から、族譜、位牌、墓碑といった文字記録で保証される厳格な条件を満たす死者のみを選び出し祖先として認めるという漢族の間で共有される祖先観は、そもそも連家船漁民たちにとってさほど大きな意味を持たないことを指摘する。

第５章「移動を続ける連家船漁民の暮らし」では、連家船漁民にとっての水上／陸上の境界性についてより具体的に検討する。小さな漁船に乗り九龍江河口で刺し網漁や延縄漁をする老夫婦に注

目し、孫たちの面倒を見る時に働く親族ネットワーク、漁獲物を売る時に必要となる市場でのネットワーク、さらには、一度漁村を出たら数ヶ月の間は漁場附近に船を停泊させたまま戻らないという船上生活の中で重要な役割を果たす連家船漁民同士のネットワークを取り上げ、この老夫婦の移動生活がどのような社会関係に支えられて可能となっているのかを詳細に跡付ける。

終章「水/陸のはざまを生きる水上居民たち」 では、連家船漁民にとって、陸上に住居を確保するしないにかかわらず、昔も今も漁民であることには変わりがないという彼らの言葉を引き、水/陸の境界にこだわるのはそこにこだわる他者の視点ではないかと結論する。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、中国・福建省南部の沿海部や河川において長年、船上生活を営んできた「連家船漁民」のエスニック・アイデンテティ、自己認識を、彼らと生活をともにするという実体験を踏まえた一次資料に基づき記述し、分析したまさにエスノグラグラフィーからエスノロジーへと展開した論考であるといえる。そもそも連家船漁民という名は、地元で自身もその出身である郷土研究者がつけた名であり、本論は、「連家船漁民」に対する他称と自称、加えてこの郷土史家のように中間的に介在する三者の水上居民への命名の背後にある認識差とその要因の解明に正面から取り組んだ論考と言える。著者の基本的姿勢は、彼らと生活を共にし、時には参与するなどし、ある連家船漁民と義理の親子関係を結ぶに至るほどラポール、人間関係を築いた上でのイーミック・アプローチ、住民サイドの視点に立つところにある。

九龍江河口で長年、船上生活を営む人間集団を他者なる目、この場合は根拠地である農村と陸上がりした都市街区の人々がどう見、とらえるか、その一方、社会主義国中国の改革政策下の大変化をはじめどのような境遇にあれ自分たちを「討海人」・「抓魚人」と名乗り、海の民、漁民と自称する連家船漁民との関係性を明らかにするために、新中国以前の保甲制から現在の葬送儀礼まで、その歴史から民俗までの事象を可能な限り取材し記述した民俗誌として本論はまず高く評価できる。また、写真資料の多用に加えて社会関係における家族・親族図、葬式の供物や葬具の図示など資料を可視化することによって叙述の理解を助けており、現地調査の深度を窺わせてくれる。

一方、このように内容豊富な民俗誌を踏まえての分析に際しては、いくつかの注文がある。一つは先行研究の準拠枠を援用するか、それが適用外であるとすれば新たなモデルとして提示してほしい、そうすれば学界に問題提起をすることができる。本論文のキーワードともなる自称・「名乗り」と他称・「名づけ」についても、討海人・連家船漁民・水上居民・漂海民の名称の使い方に関して第一次解釈、第二次解釈と学術語としての厳密な定義が求められる。また、祖先祭祀に関係する「祖公」の位置づけについても、宗族体系ではなく、家族への志向性が強いことなども従来の理論の批判的継承の中で検討し、論じればより説得性を増すものと思われる。

いずれにせよ、本論は十分な民俗誌的記述に基づき今後、さまざまな分析の可能性を秘めた論考と言えるが、主題がエスニック・アイデンテティにおかれたために、生業における漁法・漁場、また漁獲物の販路、性的役割などへのさらなる言及、また、海洋生態学方面など学際的分野への目配りも通して論考の深化が期待される。

以上、本論文には将来に望むべき点、改善点はあるものの、水上居民に関係する民俗学・文化人類学・歴史学方面の基本文献の読破、良好な人間関係の構築の下、実際の船上生活体験、関係者からの聞き書きによる質的にも量的にも優れた一次資料に基づく民俗誌の作成、総合化とその分析により連家船漁民を総体的に取り上げた中国も含め国内外における最初の本格的研究であり、水上居

民研究史に新たな一頁を加えたとともに、広く比較研究に適用できるモデルを示したことは学界に対して大きな貢献をなしたといえる。また、水上居民である連家船漁民に対する筆者の共感とその調査・研究に対する真摯さが十分に反映した労作といえ、博士（歴史民俗資料学）の学位論文にふさわしいものと審査員一同これを認めるものである。